

# 絨維

繊維業とは、生糸や綿、毛、麻などの天然繊維や科学繊維から糸を紡ぎ、それを織って布をつくる産業。愛知の繊維業は、桑の栽培から糸の生成、織布の製造、色つけなど多岐にわたり、産業の大黒柱として近代化を支えた。

photo:Akihiko Mizuno



column

## 明治村と 菊の世酒蔵

### 【博物館明治村】

近代建築愛好家の聖地、博物館明治村は、日本近代建築史にとっても重要なターニングポイントになった記念碑的な施設です。

昭和30年頃から始まる高度成長期は、明治以降各地に建てられた洋風建築などを壊し、新しい建物をつくることで進められました。当時、そういった少し古い時代の建物は、あまり価値を認められていませんでした。

ただ、そんな状況に早くから警鐘を鳴らしていた建築家谷口吉郎と、同窓生だった名鉄副社長土川元夫（当時）が明治村の開村に乗り出します。また開村に向けて、本格的な近代建築の調査が全国で開始されました。これをきっかけに、日本の近代建築の調査は飛躍的に進み、後世の保存活動の礎となったのです。

現在、明治村には国指定重要文化財が11件、愛知県指定文化財が1件、国登録有形文化財が52件あります。その中のひとつ、菊の世酒蔵<sup>ひよし</sup>は、幅約16メートル、長さ約33メートルに2メートルの庇が付いた大きな仕込蔵です。明治28年に刈谷の菊廣瀬酒造として建てられましたが、それ以前に穀物蔵だったものを移築したと考えられています。風貌と経歴が、どこどなく九重味淋大蔵を思い起こさせます。

醸造<sup>にんとうしゅ</sup>でいえば、明治村と同じ犬山市の城下町にある小島家住宅に、朝鮮伝来の忍冬酒という甘口の珍しいお酒があり、こちらもおすすめです。







photo:Hitoshi Kumamoto / Akihiko Mizuno

木綿蔵ちたと隣接する知多岡田簡易郵便局。ゆったりした関係性が街並みの起点として上手に機能している

## 木綿蔵ちた (旧竹内虎王商店木綿蔵)

街並散歩道の始まりを飾る、白い蔵



蔵前の空間。木綿ののれんが美しい

### 知多岡田に残る古い街並み

ゆるやかにカーブする道沿いのおかき屋辰心を目印に、岡田街並散歩道がひっそりと始まります。

一歩足を踏み入れると、そこには古い街並みが広がり、起伏のある道に沿って趣のある家屋や蔵が続いています。

入り口で出迎えてくれるのが、木綿蔵ちたと知多岡田簡易郵便局です。蔵の前面は開放され、隣の郵便局との間にはゆったりとしたスペースが設けられています。

### 生き残った建物

木綿蔵ちたの前には、かつて竹内虎王商店の寄宿舎がたっていました。それが取り壊された時、地元の街並み保存会が蔵の保存を訴え、木綿の機織りを後世に伝えるための施設へ生まれ変わった経緯があります。

蔵に足を踏み入れると、機織り機が整然と並び、きれいに染められた綿糸や手織り木綿でつくられた製品が蔵内を彩っています。ここでは機織り体験も行われ、柔らかな風合いの木綿製品とともに、今も多くの人に親しまれています。

休日にはここを使って、街歩きツアーやアートイベントなどが開催され、賑わいを見せています。

### 木綿産業と竹内虎王

知多岡田の木綿産業は江戸時代にさかのぼります。農家の副収入として機織りが行われ、江戸中期になると販路を拡大。知多半島で栽培されていたワタでは追いつかなくなり、三河からも綿を購入しました。

明治になり、繊維産業が殖産興業として進められると、多くの生産地を抱える愛知県も発展を遂げます。また明治中期頃から登場した動力織機により、手織りから機械織りが主流となり、工業化に拍車をかけました。

岡田の木綿産業を支えた竹内虎王商店は、竹内虎王自らが開発した竹内式織機を用いて織布を生産した興味深い企業です。ちなみに世界初の全自動織機を開発した豊田佐吉が、この地方で機織り機を研究したという言い伝えもあります。

木綿蔵ちたは、竹内虎王商店の木綿の収蔵庫として建てられました。防火対策が最も重要な土蔵は、密に組まれた木造の上に小舞という竹で組んだ下地をつくり、そこに綱を



蔵内に置かれた機織り機

かけて土を塗ってつくられます。その上に漆喰を塗って仕上げるため、ぼつんと開いた窓と白く塗られた外観になり、出来上がった建物は、どこか可愛らしい姿になります。

こちらの蔵は、正面を向いて入り口が2つあり、向かって左が片開き、右が観音開きの土戸となっていて、左右非対称なのも特徴です。広い軒下空間(蔵前といえます)では、荷降ろしなどの作業が行われていました。



東側の下見板張りの外観

明治後期〜大正前期頃  
土蔵造2階建て  
【設計】不明  
愛知県知多市岡田字中谷  
http://momengura.cside.ne.jp

登録／2017年6月  
登録基準／造形の規範となっているもの(旧事務所)  
国土の歴史的景観に寄与しているもの(その他)



北側の木綿蔵。軒を連ねた南蔵が見えている。手前の大きな蔵前で荷降ろしの作業が行われていた

## 旧中七木綿本店

岡田屈指の木綿製造会社の本社屋

### 岡田街並散歩道

木綿蔵ちたから岡田街並散歩道を西へ20メートルほど進むとT字路があり、角に立派な長屋門がたっています。ここにはかつて、岡田の木綿産業を支えた中七木綿合資会社が本店を構えていました。長屋門をはじめ、現在も敷地内には旧事務所や木綿蔵、寄宿舍などが残されています。T字路を右に曲がると、正面には1350



長屋門

年に創建された慈雲寺があり、岡田が栄えていた頃には、門前広場のお店は出稼ぎの女の子で溢れ、とても賑やかだったそうです。

### 中七木綿合資会社と本社屋

中七木綿合資会社は、明治29年に加藤六郎衛門らによって起業された綿布製造会社です。その時、岡田で初となる動力織機を24台輸入し、昭和初期には3つの木綿工場を所有する企業へと成長しました。

その本社屋となる中七木綿本店は、大正3年に建設されました。

岡田街並散歩道に面して19メートルの長屋門を設け、その前には堀がありました。長屋門とは、使用人の住まいや作業場、納屋などが門とひとつの建物になっている。元は武家屋敷で用いられた形式です。この長屋門も、納屋や社員の食事室、浴室が付随していました。門をくぐると正面には旧事務所が



南蔵の蔵前

あります。もとは門前広場側に向いていましたが、曳家して今の場所に移動し、住宅として使用されています。起りのついた屋根と、黒漆喰の壁は当時のままの意匠です。

旧事務所の奥には木綿蔵が2棟並んでいます。それぞれ独立した蔵ですが、蔵前がひとつにつながり、木綿製品の梱包などの作業を行える広い空間になっています。また、外壁には黒く塗った下見板を張り、漆喰で仕上げた部分も柱を見せる大壁にしています。

南蔵の2階に上がると、小窓から差し込む光が「アルプスの少女ハイジ」の屋根裏部屋を思わせ、むき出しの小屋根もその気分を盛り上げます。小屋組みを受ける柱と梁のガツタリとした構成も、建築的な見所です。このような軸組は、建物全体のプロポーションにも影響し、外観の見栄えにつながっています。

敷地内には他に作業所・寄宿舍も残り、蔵のような骨太の軸組で構成されていますが、窓は大きく開けられ、外観も旧事務所と似た黒漆喰で仕上げられています。

### 山七印の鬼瓦

門前広場の喧騒も今はなく、岡田の街並みは時間が止まったように、ゆっくりと流れています。



南蔵の2階

1914年(大正3年)頃  
「設計」不明  
旧事務所／木造2階建て、北蔵、南蔵／土蔵造2階建て、長屋門／木造平屋建て、作業所・寄宿舍／木造平屋建て(一部2階)  
愛知県知多市岡田字開戸28-28-1 ※見学不可





ガラ紡糸のタペストリーの掛かる廊下。コの字型に中庭を囲って各部屋が配置され、館内はとても明るい

## 豊田市近代の産業とくらし発見館 (旧愛知県蚕業取締所第九支所)

社寺建築の細部を持つ、鉄筋コンクリートの旧試験場



外観。正面の屋根には千鳥破風が載る

### 鉄筋コンクリートと和風建築

開発が進む豊田市駅のほど近く、高層ビルの迫る住宅地に紛れて、低層で瓦屋根が載り、社寺建築のような斗拱を持つ建物がたっています。斗拱とは柱の上に載る構造材をいい、ここでは大斗と2本の肘木を指します。

斗拱の下の柱をよく見ると、角が切り落とされ、上から下に幅が狭くなっており、とても凝ったデザインであることが分かります。

この建物は、大正10年に蚕の病気の検査や

品種改良の研究を行う施設として建設されました。屋根は木造で、その下の軸部は鉄筋コンクリートで造られています。

このような和風のデザインと鉄筋コンクリート造を組み合わせた建物は、名古屋市庁舎などの帝冠様式の建物が代表的です。しかし、その萌芽は大正初期に起こり、この建物もそんな時代の気分を現しています。

建物の前に構える門も同じデザインで、石積みを模した柱の上部には斗拱があり、瓦屋根を支えています。

### 孝母町から豊田市へ

豊田市は旧名を孝母町といい、かつては養



外観の柱。斗拱と角の造形に注目

蚕を主要産業として発展しました。明治以降の繊維産業の根幹には生糸の生産があり、その輸出货量は、世界大恐慌で激減する昭和5

年頃まで圧倒的なウエイトを占めていました。まさに国を支えた産業だったのです。

生糸は、蚕がつくる繭を元に製造され、その蚕のえさの桑を栽培して育て、繭を出荷するのが養蚕業となります。当時の国内で見ると、富岡製糸場を有する群馬県が圧倒的な生産高を誇り、次いで長野県、そして愛知県などが続きました。

世界大恐慌以降に衰退した養蚕業でしたが、孝母町には新しい産業の工場誘致の話が舞い込みます。それがトヨタ自動車でした。

戦後、孝母町は孝母市、そして豊田市と名前を変え、世界の自動車メーカーの本拠地として日本を支える街となつていきます。

### みんなの建物

現在、建物は文化施設として、近代産業の機械やその資料、少し前の茶の間の風景などが展示されています。

また、他に学習室や実習室があり、小学校の社会見学や、教育施設としてワタを栽培するなど、さまざまな活動に使用されています。



夕日が差し込む学習室

1921年(大正10年)  
鉄筋コンクリート造平屋建て(屋根は木造)  
[設計]不明  
愛知県豊田市孝母町4丁目45番地  
<http://www.toyota-hakken.com/top.html>



photo: Hiroshi Yoshida

外観。台形の敷地を高い壁で囲い、周囲から遮断している。一方で、事務棟は開放的な明るいデザイン

## 墨会館

愛知県で唯一の、巨匠丹下健三の作品



事務棟内観。スクリーンで光を調整する

### 日本最高の建築家、丹下健三

戦後の日本建築界には、丹下健三というスーパースターがいました。初期の代表作広島平和記念史料館（1955）では、モダンデザインを日本の空間感覚と融合させ、また東京オリンピック国立屋内総合競技場（1964）では、革新的な構造とダイナミックな造形で世界中を驚嘆させました。

丹下は、世界に通用する日本で初めての建築家でした。

墨会館は、そんな丹下が新しいデザインを模索していた黎明期の作品です。

徹底された美学には、ただ圧倒されます。

集会所と事務棟をつなぐ中庭には糸杉が植えられ、別世界のような静けさが漂っています。

当時の丹下は、近代建築の巨匠ル・コルビュジエの造形感覚や同じく巨匠ミースのグリッド、それと和風の意匠の融合を手探りで模索していました。そんな実験を行いながらも、高いクオリティの建築にまともな上げたところに、丹下の並々ならぬ力量がうかがえます。

墨会館は現在、小信中島公民館として市民

に開かれ、ごどもから大人までが気軽に利用し、館内には穏やかな空気が流れています。

巨匠の名作は、幸福な第二の人生を歩んでいます。



事務棟会長室。以前は丹下設計の什器があった

### 艶金興業と本社屋

墨会館は、もとは艶金興業株式会社という染色整理加工業を営む企業の本社屋でした。

江戸時代から繊維産業で賑わっていた一宮は、明治以降の殖産興業で発展する生糸や木綿に距離を置き、毛織物に新たな活路を見出して成功を収めます。その中心の企業の一つが艶金興業でした。

昭和27年、当時社長だった墨敏夫は、新進気鋭の建築家丹下に本社屋の設計を依頼します。すでに多くのプロジェクトを抱えていた



中庭ごしに事務棟を見る。庭の敷石までグリッドが整っている

丹下は難色を示しましたが、最後は情熱に押され設計を引き受けました。

### 巨匠の黎明期の名作

墨会館のたつ場所は、かつて周囲にノコギリ屋根が立ち並び、トラックが頻繁に行き交う工場地帯でした。

丹下はそれに対して、外界から遮断するために敷地全体を高い壁で囲い込みました。

建物に足を踏み入れると、古代ローマのアトリウムのような空に開いた天窓と、特注のテラコッタ壁が出迎えてくれます。

右手には2層の事務棟があり、左手には集会所が配置されています。集会所には電動で上下する照明器や巨大な可動間仕切りなど、当時先鋭的だった設備が設けられました。

事務棟には、豪壮な階段の吹き抜けホールがあり、2階の開口部から光が降り注いで、とても明るい空間になっています。事務所と中庭の間には上げ下げできるスクリーンがあり、障子のように光を調整できるしくみになっています。

また、館内は必要に応じて部屋の大きさが変えられるのも特徴です。それらは和風の寸法体系で整えられ、グリッドが床材の目地ま

1957年（昭和32年）

鉄筋コンクリート造平屋および2階建て

〔設計〕丹下健三

愛知県一宮市小信中島字南九反11-1

http://sumikaikan.jp/ ☎0583-962-1515 0

※見学可ただし2階は要予約。